

名古屋地理学会 2011 年度研究報告会／総会

【プログラム】

セッション 1 座長：伊藤健司 9:30 ～ 11:10

1-1 畠山和也（名古屋大学大学院生）：秋田県大仙市における「大曲の花火」の変遷と現在一祭り研究の視点よりー

1-2 林 上（中部大学）：パース外港・フリーマントルの港湾構造と対日貿易

セッション 2 座長：落合俊介 11:15 ～ 12:05、12:50 ～ 13:40（途中昼食休憩）

2-1 安積紀雄（名古屋産業大学）：営業倉庫立地研究の背景と姿勢

（昼食休憩／評議員会（8C 講義室） 12:05 ～ 12:45）

2-2 酒井喜八郎（名古屋市立小碓小学校）：産業経済としての林業を認識する日本の森林問題授業

セッション 3 座長：柿原 昇 13:45 ～ 15:25

3-1 上江洲朝彦（学校法人海陽学園海陽中等教育学校）：観光地の向こう側、沖縄マイスターへの道

3-2 溝口晃之（愛知県立津島高等学校）：豊田市域の河川水質

総 会 15:30 ～ 16:00

懇親会 16:00 ～ 17:00]

【発表要旨】

1-1 畠山和也（名古屋大学大学院生）秋田県大仙市における「大曲の花火」の変遷と現在一祭り研究の視点よりー

本報告は、民俗学や宗教学が進めてきた、祭りの捉え方を整理することから始める。そして、「祭りは特定の時間に、特定の場所へ人、モノを集める現象である」という、地理学からの祭りの捉え方を提示する。

以上のような祭りの捉え方を踏まえ、本報告では、秋田県大仙市大曲地区で毎年 8 月第 4 週に行われる全国花火競技大会（通称、大曲の花火）を対象とする。大曲の花火は、全国から花火師が集まり、花火を上げる。そして、花火を見るために約 80 万人の観客が訪れる。本報告の目的は、①大曲の花火の変遷を明らかにすること、②現在の大曲の花火に関わる人々の関係を明らかにすること、以上から③大曲の花火に、全国から花火師や観客が集まる要因を明らかにするという 3 点である。

地元新聞である秋田民報の過去 70 年分の記事を分析、参与観察、インタビューなどの調査を行った。その結果、大曲諏訪神社祭典の一部であった大曲の花火が、戦後、神社の祭典との分離する過程、そして、大曲の花火が観光行事として発展していく過程を描いた。この過程の中に、運営組織の編成と大曲の花火の権威化、そして、観覧会場の快適化といった変化を確認することができる。この点が、大曲に全国から花火師や観客が集まる要因と言える。

1-2 林 上（中部大学）：パース外港・フリーマントルの港湾構造と対日貿易

オーストラリアの南西端に位置する主要都市パースの海側からの出入口に、港湾都市フリーマントルがある。パースの外港ともいえるフリーマントルは、インド洋方面からオーストラリアへ入ってくるさいの玄関口にも相当している。このため国際貿易では、コンテナを満載してオーストラリアへ向かう外航船が最初に立ち寄る港、あるいは最後に寄港してオーストラリアを離れる港として位置づけられる。フリーマントルはインド洋に流れ込むスワン川の河口付近にあり、川を北上するとパースに至る。パースへは鉄道の便があり 30 分ほどの距離である。名古屋港とフリーマントル港の間には定期航路が開設されており、両港とも国を代表する港湾であることから 1983 年に姉妹港の提携が結ば

れた。名古屋港から見た場合、オーストラリア向け輸出貨物の 72.0 %は完成自動車、9.8 %は自動車部品である。名古屋港からオーストラリアへ向かう貨物の約 1 割はフリーマントル向けである。そのうちの 90 %近くは完成自動車・自動車部品である。オーストラリアから名古屋港へ送られる品目の 41.2 %は鉄鉱石、25.7 %は LNG、さらに 21.3 %は石炭である。大半が鉱物資源であるのとは対照的に、フリーマントル港から名古屋港へ送られてくる貨物の大半は農産物（69.5 %は小麦、11.2 %が動植物性製造飼肥料）である。当日は、フリーマントルとパースの関係、同港の空間構造と機能、それにフリーマントル、名古屋両港との関係について報告する。

2-1 安積紀雄（名古屋産業大学）：営業倉庫立地研究の背景と姿勢

営業倉庫の立地研究を 40 年近く継続してきた今日において、これまでの研究を振り返って、小生の当研究の背景とその姿勢を述べてみる。まず、倉庫立地研究に着眼した理由にはじまり、倉庫の機能・種類、および倉庫と地域との関係を明らかにする。続いて、倉庫業者の属性の分析、および荷主の性格の分析に関して、その考察方法を取りあげる。

次に調査の困難性とその克服の方法、聞き取り調査とアンケート調査の留意点をおさえる。さらに研究方法の留意点、長期の倉庫研究を継続できた理由、そこでの強調したい点を捉える。最後にこれまでの倉庫研究での課題、研究対象地域の変遷、貨物保管と地域との関係にも触れる。以上、倉庫の立地研究について、主として自己の実践を通じて得られた留意点や成果などを多面的に報告する。

2-2 酒井喜八郎（名古屋市長小碓小学校）：産業経済としての林業を認識する日本の森林問題授業

研究の目的 本研究の目的は、環境教育における日本の森林学習の問題点を明らかにし、森林経済学の成果を組み込み、産業としての林業を認識する森林授業を開発することである。

研究の方法 1) 先行研究の授業から見た問題の所在、2) 各教科書の記述分析、3) 産業としての林業の指導要領の分析、4) 森林経済学からの視座、5) 授業モデルの開発。

当日は、日本の林業学習を、「地理教育」の視点から考えたい。

3-1 上江洲朝彦（学校法人海陽学園海陽中等教育学校）：観光地の向こう側、沖縄マイスターへの道

年間 560 万人以上の観光客が訪れる沖縄。この南国に癒しを求め多くの人々が足を運んでいるが、「生活の場」としての沖縄は決してイメージ通りの場所ではない。沖縄戦、本土復帰、そして今も横たわる米軍基地など、沖縄が持つ地理的特性ゆえに経験してきた歴史は、何気ない沖縄の景色に垣間見ることが出来る。

本発表は、発表者がフィールドワークで収集した交通関係の資料や、知人に沖縄を案内する際に参照している写真やデータを中心に、スライド形式で沖縄の今を紹介していく内容である。そして沖縄に対する見識を拡充し、それらを通して地域に横たわる課題・特性を分析する方法論を中高生が学びきっかけになればと構成したものである。沖縄の地域イメージの向こう側に見える地域性の考察を通じて、郷土に愛着を持ち、冷静な眼差しでその未来を展望する契機となれば幸いである。

3-2 溝口晃之（愛知県立津島高等学校）：豊田市域の河川水質

豊田市域で行っている水環境の調査、今回は主として河川水の水質について報告する。対象地域は豊田市の全域、水系としては矢作川、逢妻男川、逢妻女川である。水文学の調査で一般的に行われているように、調査期間を灌漑期と非灌漑期に分け、灌漑期として 2009 年 8 月、非灌漑期として 2010 年 2 月に実施した調査結果を示す。現地では水温、水素イオン濃度（pH）、電気伝導度（EC）を測定し、また採水した水を持ち帰り、イオンクロマトで溶存成分を分析した。

水質はその地域の自然環境を反映するので、地形や地質や土壌などとの関係を考察するとともに、畑地・果樹園・市街地・工場・ゴルフ場などの土地利用、人工林の割合、ダム湖の影響など、流下に伴う人為的な影響にも言及する。大局的には上流ほど水素イオン濃度（pH）、電気伝導度（EC）が低く下流に行くにしたがって次第に高くなるが、その変化の仕方には地域的な特色があらわれ、それを当日に報告する。

※発表時間は 1 件あたり 50 分（10 ～ 15 分程度の質疑応答を含む）